



附番繪瑠璃淨り振首供子

子供首振り芝居の流行

變態興業物の一種

その頃の興行界を風靡した流行物に、首ふり子供淨瑠璃といふ、淨瑠璃道から見れば世紀末的な變態性の一つの顯はれがある。これは、人形の代りを俳優がして臺詞は一言も云はず身振りばかりで芝居をする。太夫三味線の床が主であつて、人形遣ひが俳優を人形のやうに操るのであるが、もつとも此流行はすでに天明年間にも一時あつたが、天保嘉永に至つていよく盛んを極めてゐる。俳優も太夫も三味線も皆子供ばかり、ちよつとお伽芝居のやうで

婦人や子供客を喜ばしたものでらう。『子供首振り芝居』といふ看板を上げた天明五年道頓堀若太夫の芝居の興行では、頼太夫の床。甘輝（奥次郎）錦祥女（花桐）和藤内（友藏）といふ顔觸れの子供達で『國性爺合戦』が出た。この芝居を見物した當時七歳の梅玉歌右衛門が、自分達とおなじ年頃の子供が芝居をしてゐるのが羨やましくてたまらない。而かも首ふりといふ變つた形式だつたから、彼はどうでも此一座へ出て見たいと思ひつめたら、矢も楯もたまらず、その若太夫の芝居の勘定場にゐる伯父の源藏に頼み込んで、次の芝居から出して貰ふことになつた。その芝居は『廿四孝の三段目』磯太夫が床、景勝（奥次郎）お種（一徳）母（花桐）慈悲藏（音松）さうして梅玉歌右衛門は横藏。尙大切の『伊勢物語』では梶太夫、春太夫雛太夫三人掛合の床。小よし（花桐）豆四郎（奥次郎）しのぶ（一徳）鑄八（音松）有常（歌右衛門）とかういふ役割で、たいへんな大當り大入りを占めた。それは偏に日ごろ信心する千日前竹林寺の不動尊の御利益であらうと子供心に喜んだ……とかう『梅玉餘響』にある同優の手簡の中に見へる。それ以後各地をこの『子供首ふり芝居』で巡業をして廻つてゐたといふ。

その梅玉歌右衛門が有名な俳優となつた天保二年五月の道頓堀角の芝居で、操り歌舞伎打交興行といふのをやつてゐる。いふまでもなくこれはもう子供ではない、而かも名優と名家との混交芝居である。前が『義經千本櫻』切が『嬢景清八嶋日記』の日向嶋で。この

切狂言が即ち打交狂言なのである。太夫には藍玉こと組太夫。三味線鶴澤勇造、人形吉田千四。といふ大家揃ひで、歌右衛門は景清の役を首振りで勤めてゐる。歌右衛門の口上書に

此度操り方衆中ミ打交にて組太夫殿を以て首振り操りにて私相勤め申候



歌右衛門太組太夫打交興行番附

とある。この口上書を解釋すると、なか／＼意味がある。組太夫殿と云ひ、全文甚だ敬意を拂つてゐる。それは何故かといふと元來淨瑠璃太夫は俳優とは一緒に公衆の面前へは出ない。芝居の地を勤めてはチヨボ(芝居の下座に使ふ淨瑠璃)に墮ちるのだから出ないことになつてゐる、だが今度の場合はかうして俳優を臺詞なしの人形として使つてゐるのだから差支ない。といふので他の太夫仲間からも何等の故障は出ない、それはかりか歌右衛門は以上の如く太夫を尊重して、叮嚀に自分の舞臺へ迎へてゐるのであるから、それでよいわけである。

またこれより以前竹本政太夫、豊竹駒太夫、同君太夫、人形の吉田冠藏や三吾などの大家連も此種の興行に出てゐることはある。ずつと後になつて明治二十二年頃、角の芝居で、先代市川右團次(齋入)が『二十四孝』の八重垣姫に扮し、豊竹柳適太夫、豊竹廣作の床。吉田辰五郎の手摺で、首振人形仕立で勤めてゐることは知つてゐる人々もあらう、勝頼(延三郎)濡衣(巖笑)であつた。

わけてである。嘉永六年三月に道頓堀若太夫の芝居で興行した『子供首振り芝居』が、此種の興行の中興とも云つていゝだらう。『妹背山三段目』が美しい繪番附になつて發行されたりしてゐる。大判事(市川福太郎十三歳後に齋入)久我之助(實川延太郎六歳)定高(市川猿之助十歳)雛鳥(三桝源五郎六歳)腰元(淺尾房之助五歳)太夫側は妹山が(當組太夫七歳)背山が(長子太夫七歳後に五世彌太夫)三味線は(豊八七歳)團八七歳)とである。この以後子供首振りはなか／＼侮り難い勢ひで流行して行き翌安政元年六月、竹

田の芝居では、前『朝顔日記』次『今昔浪花噂』切『切籠曙』が歌舞伎大切が即ち打交興行で『壇の浦兜軍記』琴責、子供役者では、市川米藏（後の市川左團次の兄）が岩永。中村政治郎（後の梅玉）が阿古屋。重忠を中村嶋之助、榛澤が中村駒之助。子供太夫は岩永長子太夫。阿古屋が當組太夫。重忠が小住太夫。三曲は寛次改め鶴澤大吾郎。以上の役割である。この流行はもちろん道頓堀にはかぎらず、御靈裏門の席。座摩神社裏門の席。北堀江阿彌陀池の席。その他あちらこちら可なり盛んである。この流行につれて子供役者からはいろ／＼の顔觸れを首ふり芝居へ送つてゐる。中村米吉（後中村歌六）片岡松之助（後中村紫琴）實川頼藏。實川延松。市川赤助。尾上多見七。尾上多見之助。嵐雛之助。中村雀之助。中村福松。中村もしほ。三榊福太郎。中村玉太郎。片岡玉二。嵐豊丸。嵐芳之助など。

こんな風にだん／＼子供首ふりが盛んになるにつれて、淨瑠璃太夫と俳優との境目が怪しくなつて來たものと見へて、淨瑠璃の結社因講では安政四年十二月、首振り淨瑠璃歌舞伎打交興行に就ての是非が論議されて、結局は弊害ありと認めて、今後此種の興行に出演するものは除名處分に附すといふやうな決議をした。これで當分仲間からは一切出演するものは出なくなつたのだから、勢ひ中絶の姿で、さしも流行を極めた子供首振りも影をひそめたが、それはたつた一二年のこと、三年目の萬延元年から又々再燃して、ドシ／＼流行し出したのである。それがとう／＼明治維新の頃まで續いてゐる。後には一廉の俳優になつた多くの少年俳優が、この首振り芝居の影響を多分に享けてゐたことは争はれぬ事實であらうと思ふ。

なほかうした子供淨瑠璃の起源はいつの頃のことかと調べて見ると、現在のところ、もつとも古い文獻では、享保十六年六月一日、東の芝居の豊竹座で、近松門左衛門の『酒吞童子枕言葉』の出た時、その幕間に『間の物』といふ斷り書がついて、子供達の道行風の狂言が出てゐる。むろんこんな性質だから、道具や背景は用ひないで、幕を背景にしてやつたものであらう。越前少掾の門人で、左近右近、三味線が野澤文二郎といふのが勤めてゐる。右近がワキである。どうやらこゝらが子供首振芝居の始めであらうらしい。